

2020年
9月14日号 No.1581



週刊 教育資料

EDUCATIONAL PUBLIC OPINION <http://www.kyoiku-shiryō.co.jp>



潮流

相手が理解しやすい話ができるスキルを

一般社団法人コミュニケーションスキル協会代表理事

野中アンディ[Ⓓ]

資料

令和元年度学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果(速報値・概要)

———文部科学省

CONTENTS

▶ 2 潮流

相手が理解しやすい話ができるスキルを
野中アンディ(一般社団法人コミュニケーションスキル協会代表理事)[Ⓓ]

▶ 5 解説・ニュースの焦点

○休日の部活動を段階的に地域へ移行
編集部
○統計調査のオンライン化促進——文科省
編集部

▶ 8 校長講話

戦後75年～1枚の写真から思うこと～
岩瀬正司((公財)全国修学旅行研究協会理事長)

▶ 10 管理職養成 教頭実務ガイダンス

かけがえのない存在[Ⓒ]～新型コロナ～
多久知明(新宿区立新宿西戸山中学校副校長、全国公立学校教頭会前会長)

▶ 12 管理職選考合格への流儀

教育は人なり 学び続ける教職員を育てる[Ⓓ]
佐々木哲夫(広島大学大学院客員准教授)

▶ 14 管理職必携 安心・安全の新常識

～誕生から今年で30年～
障害配慮の共遊玩具[Ⓒ]
中田 誠(一般社団法人日本玩具協会事務局)

▶ 16 特別資料

全国的な学力調査のCBT化検討ワーキング
グループ中間まとめ「論点整理」

▶ 19 資料

令和元年度学校における教育の情報化の実態等
に関する調査結果(速報値・概要)
文部科学省

▶ 35 教育の危機管理

コロナジレンマ
石橋昌雄(立正大学社会福祉学部准教授、元公立小学校校長)

▶ 38 事務新時代

子どもの就学を見守り、保障していく取組
～事務職員にできること、すべきこと～[Ⓒ]
柳澤清香(埼玉県川口市立青木中学校事務主幹)

▶ 40 高校現場最前線

企業の社会的責任を全うするプロフェッショナル人材の育成[Ⓒ]
田村光宏(滋賀県立八幡商業高等学校 前SPH推進室長)

▶ 42 若手教師に伝えたい

「学級・授業づくり」とっておきのツボ
いっしょに笑う
～今、教師ができること～
俵原正仁(兵庫県芦屋市立山手小学校校長)

▶ 44 変わる教育委員会

教育行政のマネジメント
—学力向上に向けた取組—
松本 眞(兵庫県・尼崎市教育委員会教育長)[Ⓓ]

▶ 45 教育問題法律相談

休憩時間中の児童の事故についての学校の安全配慮義務と事故後の調査・報告義務
三坂彰彦(弁護士)

▶ 46 現場の課題に応える教育センター

GIGAスクール構想・端末でプログラミングする「文化」創造のために
澤井 進(公益財団法人学習情報研究センター専務理事)[Ⓓ]

▶ 48 BOOK

『小学校英語のジレンマ』
『幸福感に関する生物学的随想』

▶ 49 自著を語る

『リスクの正体』
神里達博(千葉大学大学院国際学術研究院教授)

▶ 50 今さら聞けない!? マナーと常識

封書における表書きの作法
柴崎直人(岐阜大学大学院教育学研究科准教授)

▶ 51 データで見る教育

人口推移予測と児童生徒数の推移

▶ 52 マイオピニオン

「失敗」から考える「学び」
貝塚茂樹(武蔵野大学教授)



野中アンディさんに聞く①

一般社団法人コミュニケーションスキル協会
代表理事

潮流

相手が理解しやすい話ができるスキルを

自分の考えを分かりやすく伝え
相手に理解してもらう話し方には
論理と語彙（修辞）のスキルを
鍛えることが大切だという。

世界基準のスキルを学ぶ

プレゼンテーションは、つまるところコミュニケーションであり、分かりやすく自分の考えを伝えるとともに、議論をすることで批評的な思考が生まれ、新しいアイデアや知見を共有できる。コミュニケーションスキル協会が世界基準のスキルとして重視してきた考え方だ。前回も紹介したように、「辞書ゲーム」など、抽象名詞を別の名詞で終わるように言い換えて表現することで、語彙が広がる。さらに事前にプレゼン原稿を推敲することで、段落と段落の関係など論理的な文章表現の力も伸びていく。スライドに頼らずに、自分の言葉で説得力のある話ができるようになるため、このような力の育成に興味を示し、自信を持って子どもたちを指導したいという教師なども増えてきたという。

野中 前回お話しした「プレゼンテーション道場」では、小学生でも訓練をすることができるので論理的で説得力のあるプレゼンができることを紹介しましたが、先生方ははじめ、大人も驚くほど、立派に自分の意見を主張するようになります。そこで、プレゼンテーション授業の方法を教えるスキルをトレーニングする教師向けの講

座を開発しました。

この教師向けプレゼンテーション講座は、小学生から高校生までを指導する際のポイントを学ぶとともに、教師自身が論理と豊富な語彙で原稿を作って、プレゼンテーションスキルを高める内容になっているという。3級では30秒程度の「Show and Tell」、2級では「自己紹介」(1分)と「人気者になれる話」(3分)、1級では「情報伝達と説得のプレゼンテーション」(各7分)の指導のポイントを自らも体験しながら学んでいく。また、教師向けの特別講座として、模擬授業を通して原稿の添削やプレゼンテーションのポイントを確認するとともに、修辞法についても詳しく学び、抽象名詞など的確に使えるようにするなど、「教え方を学ぶ」内容としている。

野中 私たちの講座には、先生方だけでなく、一般企業の管理職の方なども参加されていますが、コミュニケーション学に基づくトレーニングの方法は共通しています。例えば2級の「自己紹介」(1分)は、日本人の場合、最初は話にも谷もなく同じ調子で話す方が多いです。しかし、まず「自分はこういう仕事をしている」と背景を語り、「今、こういうことで困っている人はいますか」「私が

やっている仕事は、それを助けるものですよ」などと話の流れを作っていくと、「困っていること」に共感している人は「もっと話を聞きたい」と思うはずですよ。このような自己紹介は聞き手の印象に残りませんし、友だちがどんどん増える話し方につながるのです。そのような話し方を事前に原稿を作り、添削しながら準備しておく、スライドや指示棒などがなくても、話の内容そのものが説得力のあるものになります。

成果物でなくプロセスを見る目を

学校現場では、総合的な学習(探究的な学習)の学びの成果の発表などにプレゼンテーションソフトを使った発表会を行うことが多い。結果として、プレゼン資料など、成果物のみが注目されがちだが、大切なのは、その結論がどのように導かれているかというプロセスや仕組みにまで目が届いているかという点にある。

野中 例えば、美食家の人がおいしい料理を食べて、「あ、おいしいね」というひとりで終わらせたとしても、料理人であれば、今回は塩こしょうの配分を変えたからだなど理解できますが、一般の人は何がおいしかったのかは分かりません。

プレゼンなどの評価も、普通の人は「よかった」「自分もやってみようと思った」程度の感想が多いのですが、私たちの講座を受講して学んだ人は大人も子どもも「今回は、流れが論理的で分かりやすかった」とか「ここで使われた比喻がとても効果的だった」と批評できるようになります。ワインのソムリエは、ワインの匂いや味について、个性的でとてもイメージが伝わる表現ができますが、論理や修辞のスキルを学ぶことで、「言葉のソムリエ」として个性的で、イメージがしっかりと伝わるコミュニケーションができればと思っています。

今の時代、経団連などの財界団体の調査でも、人事担当者が新入社員に求めるものは何年間も連続で、「コミュニケーション力」がトップになっている。ところが、実際にどのような力を意味しているのかを調べると、「話を合わせるのが上手」「引き出しが多い」「ノーと言わない」などの表面的な態度を指すことが少なくない。しかし、世界的な基準では、「無駄なルートでなく最短ルートでコミュニケーションができる力」という捉え方が主流だという。「話は長いが結局何が言いたいのか分からない」のでは、コミュニケーション力が高いとは言えない。

効果的で、かつ適切な表現ができる人が「コミュニケーション力がある人」であり、そのためには、論理と修辭のスキルが欠かせない。これはコミュニケーション学という学術的研究でも裏付けられているという。

野中 日本の場合、人事担当者の回答に見られるように、コミュニケーション能力の捉え方自体がはっきりしていません。しかし、会社で言いますと、上司に対して効果的で適切な説明ができる人が求められていますし、これは結局、「言葉」に関わる能力です。コミュニケーション学では、この言葉に注目し、特に論理と語彙（修辭）の力を高めることが、「効果的で適切な」表現につながると考えています。コミュニケーション力をテーマにした講座は、日本でもいろいろありますが、この「言葉」にこだわった学びの機会が少ないのです。

「反復練習でスキルは定着

コミュニケーションスキル協会が、「スキル」にこだわるのは、小学生の「辞書ゲーム」に見られるように、これまで経験してこなかった論理と語彙のトレーニングを通して、その「要領」が分かり、スキルとして定着すると、大人も驚くような、しっかりした言葉や表現の力を発揮するように

なるという事実があるからだ。

野中 この「要領」をいつ使うかという点では、私は早ければ早いほどよいと感じています。40代の企業の関係者が、私たちの講座を受講して、「もっと早く学ぶべきだった」と言っていました。私自身は、30年前にアメリカの大学で学んだことがきっかけになりました。また、この「要領」は、反復練習をするという「訓練」で一番身に付きます。小・中学生対象の「道場」は、今年の4月からほぼ毎週の頻度で始めました。Zoomを使っていますので、体験として途中からでも参加することができます（月に1回程度）。最近も、新しく小学5年生の女子児童が参加しましたが、同じ年代の小学生が自分の考えをしっかりと発言する様子を見て、自分もそうなりたいと考えたようです。

一般の講座でも小・中学生対象の「道場」でも、毎回、次のテーマを発表して、2日後までに1分スピーチなら150〜200字程度の原稿を提出してもらおう。それを添削する際にも、「すぐく」などの副詞はカットする、同じ名詞で終わらないように言い換える、などのアドバイスとともに、短い表現でも、1分の自己紹介であれば「背景、問題、提案、解決」の要素を、話の流れの「型」として盛り込むように指導

しているという。これが3分になると、「認知的不協和（もやもや）」など不安を提示するなどの要素が加わり、その解決策を示すと、相手を引き付ける内容になる。

野中 自己紹介という簡単なスピーチでも、自分の名前や出身地、好きな物など、他人から見えて関心を持たれない内容を伝えるよりは、仕事の中で「こんな問題に困っていませんか。私はこういう提案をします」と話す方が、相手に関心を持ってもらえます。少なくとも、こういう人と名刺交換しておこうと思ってもらえるような話ができます。ビジネスパーソンであれば、単なる自己紹介ではなくて、ビジネス上の悩みの解決につながるような話ができれば、名刺交換を待つ列ができるかも知れません。このようなストーリーテリングができるようになるためには、裏付けとなる論理と語彙（修辭）の力が必要です。私たちは民間の団体ですが、これからの時代はこのようなコミュニケーションができる人が求められると考えていますので、学校教育とも連携して、なるべく若い年代からコミュニケーション力、特に論理と語彙（修辭）の力を育成することに貢献していきたいと思えます。一般社団法人コミュニケーションスキル協会 || <https://www.commskill.net/>